

外人の神道研究家としてのボンソンビ博士

加藤 玄 智

(未発表論説)

本稿は加藤博士が『ボンソンビ全集第五卷(序・追憶)』(英文)のために、親交のあったボ博士の行状を執筆されたものであるが、和文のため未発表のまま保存されていた。昭和三十八年二月十一日、御殿場東山・加藤玄智と終りに署名が見える。ボ博士の人格と学問については博士を終始援護された京都市賀茂の佐藤芳二郎氏の著『ボンソンビ博士の真面目』(昭和三十三年刊)に詳しい。佐藤氏は本尊美記念会を設置してすでに昭和十九年『神道及び神社の研究』(英文)を非売品として刊行された。五七五ページの大著である。加藤博士の本稿は佐藤氏の義弟松山謙氏の厚意によって掲載する運びに至った。この斡旋の労をとられたのは会員照沼好文氏である。因みに、佐藤芳二郎氏はさる五十四年十月心筋梗塞のため自宅で急逝された。謹んで哀悼の意を表する。

— 編集部 —

一、外人の神道研究家としてのボ博士

昭和三十八年(一九六三)二月一日偶々^{たま}々々在京都市ボ記念会代表の佐藤芳二郎君が、御殿場東山の拙宅学勞窟研究所を訪問された。

二十六年間の久闊^かを叙された後、今回故ボ博士全集の第五巻出版の計画を話された。就いては私に是非その序を書

いてくれ、とのお話だった。蓋し第五卷の劈頭第一に載せられるものは、ポ博士の論文「神道の盛衰」(英文)であつて、存命中、英国の雑誌(The Journal of the Royal Anthropological Institute, Vol. LX 1, January-June, 1931)に公表されたものである。しかし今日まで諸種の事情で、日本では全集中に収めて公刊することが出来なかつたので、其儘今日に及んだ。それが今回愈々日の目を見ることになつたということを、佐藤氏から承つた。その時、私の喜びは大変なものがあつた。それは何であるかといへば、ポ博士のこの論文は、日本の神社信仰を宗教と公言して筆をとられたものである。その点で私が博士の研究立場とは余程違つた研究の仕方、即ち宗教学的な神社信仰から結論するところの神社信仰は、一種の宗教なりという結論に合致しているからのことである。

明治初年以來昭和二十年八月の終戦当時まで、日本政府の法的立場は、神社信仰を以て宗教圏外に置き、これを宗教と見ることを許さなかつた。然るに私の学的良心もポ博士の学的良心も一致して、神社信仰又は神社神道を以て宗教の一種なりとの結論に達した点である。それが今、博士の全集第五卷に於て、思想信仰の自由公認の下に日本で出版する博士の全集中の一巻に公刊されることは、私の如き学究徒の喜びの極みである。これに次いで幾多神道関係の論文が博士の創造的新研究に依て、緻密詳細な歩武を辿つて次々と連載され、それは皆博士の日本在住の便宜を以て公けに認められた大神社の踏査と、日本語文献を自由自在に読破し得る著者の深き造詣と相俟つて文を成されたものであり、日本の専門家と雖も、その中に書き記された思想を了解することは困難な位、専精細微の歴史的深所に触れている。

こういう次第で、捕われざる神道又は神社信仰の内外人研究の著名なる成果は限なく本書に於て取り上げられて潜入していることを、私は明記せねばならぬ。詳しくは読者各位自らこれを本書に徴すべきであらう。

神道史攻君極精

踏査書索好同盟

二、友情の親交

ボ博士と交際した多くの人びとの間には、交際中、自ら親友の至情が自然に持上ってくることは何人も経験したところで、私も又その一人である。これは如何して、そういうことが出来上るのだろうか。そういう友情の親交は主として博士の人格の奥底から出てくることは勿論だが、それがどういふ形をとって外部に現われて、人びとを自然に惹きつけるかというに、第一に博士の衣食住関係から目を向けて見よう。

まず住居について考察しよう。博士の大の日本好きがここにもよく露呈している。博士は常に日本流の家屋にのみ日本滞在中は何時も住まって居った。旅行して宿屋に泊っても、立派な西洋式ホテルがあるのに、日本式家屋の宿屋に宿泊することを選んだ。また京都の外に東京にも台湾にも一家を借りて、旅行先きの小別荘とでもいふべきものにして居られたが、皆家も家屋内の家具調度に至るまで皆日本式で、椅子を用いず、端座して生活することを常とされた。

次に食生活だが、常に三度とも日本食のみを採られ、刺身等は大好物、また煎茶のほかに毎日一度は抹茶を嗜んで飲まれて居った。ここにも博士の日本流の生活を愛好しておられた真相がよく見られる。

次に衣服だが、これまた大の日本服常用者で、家内にいる時も外出する時も、いつでも日本服・朴齒まろばの高下駄という姿である。紋付きの羽織袴だ。ただ日本人から見ても異様な取合せだと思われるのは、博士が時に真冬の寒いのに紋付き細の羽織それに毛糸の襟巻という取合せは、日本人の間では一寸見られぬ外人風な考え方の現われだ、という感じを見る者に起させるところだった。

ここに面白い逸話とでもいうべきものを一つ紹介しよう。これは私が香港を旅行した時、私の案内役を勤めてくれた三井商店の若い店員から座談に聞いたものであるが、ご承知の通り香港は暑いところだから能く小丘に設けられたプールに泳ぎに行く。博士もその中の一人で、日本人とともに游泳された。博士を見ると日本人の昔風ソックリで、六尺禪を締めて水泳しておられた。猿股ではない。然るにその周囲の日本人を見ると皆猿股だったので博士と日本人との対象がまるで主客顛倒のような気がしたと、上記店員が笑話に花を咲かせていた。ここにも如何に博士が日本風を愛好されて居ったかが判り、外形は頭の先き、足の爪先きまで、日本人になりすましてみたいという念願があったことを証明しているではなからうか。

かような次第で、初めて会見して博士の面容に接すると、いかにも、ムツツリした真面目そのものというような面容・態度だから、一寸の世間話にもとりつきが悪いと思う人もあろうが、腹の中はなかなかそうでなく、日本人好きの温かい友情にあふれていた人であった。そのことは永い交際をしている日本人にはよく判っていた。私が香港に行ったとき博士は香港大学の講師で、イリオット英香港太守の秘書をしておられたが、その政庁に出勤する時だけ背広の洋服を用いられたが、その他は何時も香港の西洋街を日本服と下駄で濶歩されていた。私のような、ほんの一時の旅行者が香港大学の卒業式に招待を受けたのも、博士の好意によるものと記憶している。

香港大学には三菱商事会社からの留學生の日本人が三人位居ったが、博士の薫陶は公私ともに至れり尽せりであつて、のち京都に永住されるようになってからも、それら卒業生は常に博士の門下に入出し、一生独身で通された博士の本当の子供のように遇せられ、その中には博士の媒酌で日本人の愛妻を貰われた方もあつた。京都の立派な邸宅も、死後は全くそれら日本人に托して、遺産その他はその手で保管されていくことにされた。英本国の親戚とは寧ろ遠縁の状態であつたと思う。かように博士は日本人と個人的關係が親密であつたばかりでなく、日本国殊に皇室に対しては最もよくその人民と古い歴史を有する父子親愛の情で結びついた君臣の義のあることを知り、日本人と同様な

敬意をわが皇室に対しても、抱いていられたと思われるのである。

そこで博士は夙にわが皇室系譜を研究されて、英文の『日本の皇室』と題する一書をさえ公刊されていたのであった。

明治天皇崩御直後、われわれ日本人有志間において、天皇の御仁政を記念して財団法人明治聖徳記念学会を創設するや、博士は進んで終身会員に加わり、同会の研究所と手を携えて神道の研究に従事された。同会は毎月一回、学例会を開いて特志研究者の講演会を会員間に開催していたが、博士は滞日中同例会講演に講師として出席し、日本語を以て「君と臣」と題して、日本の皇室と人民との関係について私見を述べられた。それは後に英文で“Sovereign and Subject”と題して、上記学会の印刷物中に公けにされた。この講演内容は皇太子御学問所で、白鳥庫吉・杉浦重剛二大人らの所員を通して、殿下の御耳にも入れられたと洩れ承わっている。かようにして博士は、日本の皇室、日本国民に対して甚深な注意と敬意とを払っておられた。

つぎに中村春二の成蹊実務学校（明治四十五年設立）との関係をあげよう。

成蹊実務学校（現在の成蹊大学の前身）は中村春二氏が今村・岩崎二氏の出資で明治四十五年池袋に創立した甲種商業に類する各種学校である。英国のパブリック・スクールに範をとり、これに東洋的な僧堂教育の特色を加えて、創業された。寄宿舎を設け夏休みを廃止し、鍛練法として凝念法、徹夜会、断食などが採用された。凝念法は岡田式静座法に基づくが、これに理論的根拠を与えたのが「真我」の開発すなわち「心の力」という校歌である。

ポ博士は岩崎氏らと親交があったので、この成蹊実務学校にも東京滞在中は、臨時講師として出講し、英語教師の一環を担われた。そのころ中村校長が「心の力」と題する同校の道徳的理想教育を歌った小篇を公けにされておったが、博士はそれを英語に訳出して生徒教育の語学と徳育の一石二鳥を演じておられたので、生徒たちにも利するところ少くなかったと思う。

なお水戸学のバイブルともいべき藤田東海の『弘道館記』についても、その英訳を委嘱され、これを快諾して財団法人明治聖徳記念学会から記念出版をされた。(昭和十二年・一九三七)

かような具合いで、個人に対しても、また団体に対してもボ博士の日本人への親交友情は、つねに変わらぬものがあったのである。

三、ボ博士の人格的魅力

終りにボ博士に就いて、もう一つ是非話しておきたいことがある。それはただ一つ、博士は宗教信仰の人格者、聖者であったということ。仏教語を利用して言えば、聖親鸞が清香馥郁の人とでも言わんとして使った妙好人とでも呼ぶべき君子人であったということである。そのことの輪郭はすでに上記の記事でも自ら想像されるのだが、その外に博士の最後において、私を深く感動させた一事が今なお記憶に新たである。

昭和十二年十二月十日臨終の時における博士の宗教心即ち基督教信仰の至誠の心のとばしりを、この席で遺憾なく表彰されたことである。

博士の病迫るや、危篤の報に接して、私は東京から夜行急行列車で入浴し、直ちにその居、上賀茂の自邸に博士の病床を訪うた。

その時は臨終刻々と迫っている時で、席には私と同様、馳つけられた博士の友人、当時外務省お雇いの同国人たるベーティ博士が居られ、何人かのボ博士と親しい日本人青年が看護の世話をし、牧師も立会って、最後の説法を病床の博士に向って行なっているところであった。しかし驚く勿れ、この牧師は外人ではなく日本人牧師であった。

その説法の言葉も、英語ではなく日本語であった。これに応答される博士の言語も、その自国語でなく日本語であった。蓋し博士は臨終最後の時まで、日本人らに日本語を使用して訣別して逝かれたのである。ここにも如何に博士

が真面目な意味での、日本眞面目であり、真面目な日本の友人であったかが判明する。殊に私に深い感動を与えたものは、博士が死に至るまで、即ち博士の揺籃から墓場まで、一生を貫いての基督教信者であったということである。そこにも博士が徹頭徹尾、真面目な至誠の人格者であったことを証明する。

私は多くの日本人眞面目の外人も知っている。その中にはいわゆる外交辞令に過ぎないのではないかと思われる位、美辞麗句で日本人を賞讃し、甚しきに至っては、基督教国の人でありながら神道信者に鞍替えでもしたのではないかと疑われるまでに、外形を繕っている人物も少なくはない。

然るにポ博士に至っては毫末もそんな悪びれた気配はなく、あれ程、神社の祭神討究闡明等進められたことは日本人以上であったのに、神道に改宗する等のことは決して気振りにも出されることがない。寧ろそれはポ博士の人格の深い深い底の処に潜んでいる幼少の頃から鍛えあげられた基督教信仰が堅く根を下して居ったからであると、私はその病床で納得のゆくまで看取することができた。この事を裏づけるように、些事ながら左の一駒の逸話を挿入することができる。

私が大正十三年（一九二四）に官命を以て学術研究のため歐洲に出張を命ぜられた時、ロンドン滞在中、ロンドン郊外の近い所にあつた博士の本邸に客となつて、三四日起臥したことがある。この間つねに博士と起居を共にしていたが、或日曜の朝、いつもの食卓に朝飯をとろうと思つて、顔を出したところ、いつもの席に博士がおられない。どうしたことかと思つて給仕の人に聞くと、その日は日曜だったので、博士は村の教会の会合に出席するために、今朝は外出された、と答えた。

かように、こと基督教の信仰に関しては、遠来訪問の来客をもはずして、基督教の会に出席された程、真面目にして熱心な基督教徒で居られたことを、事実がよく証明していると、私は思う。

これと関連して脳裡に浮んでくるのは、曾て高楠順次郎博士が東京帝大在職中、茶話に話された小話である。高楠博士もロンドン留学中、梵語学者の有名なマックス・ミュラー博士に師事しておられたが、ある日曜の朝、訪問すると、その書齋にはこれもやはり当時有名な梵語学者リス・デビズも居って、盛んに仏教の話に花を咲かせていた。そこで高楠博士は直ちに質問された。「今日は日曜であるのに先生方は何故教会へ行かれないのですか」と。するとマックス・ミュラー博士は声に応じて答えられた。なに、日曜日の教会行だと問うのか。われわれ兩人は既に教会に来てゐる。即ち此処では盛んに宗教の論議を交してゐるではないか。これがわれわれの教会出席だよと。

そこで高楠博士も納得がいき、いかに比較宗教学を取める者が、かくまで基督教の外の宗教に対しても寛容であるか、彼等兩先生には毫末も西欧社会にあり勝ちの基督教の偏見に左右されて、他宗教を蛇蝎の如く嫌い、排斥するななどということは少しもなく、研究上からは諸宗教皆一視同仁、何等の偏見もなく、公明正大にこれを取扱い、学的真理討究に没頭する。それが宗教の本色である。そこには学究的至誠の精神が明々白々、地に露呈されている。

そこで学究的に言つても至誠、信仰的にいつても至誠、マックス・ミュラー対ポンソビこの兩大人が至誠または誠の心で全然一致している事実がよくわかる。すなわち眞の研究の至誠、眞の信仰の至誠、一あつて二なきものであるからだ。

x

x

さて元へ戻つて、臨終最後の一夜とも言うべきポ博士の上を、もう一度見上げるに、今やかようにポ博士の信仰は、金剛堅固の信心ともいふべき固いものがあつたが、それだからといって、かような堅い信仰を有している宗教信者にはまた偏僻性偏見とが附添つていて、宗教的偏執に捕われて他の宗教に対しては極めて不寛容、寛容性の如きは棄にしたくもない、というような人物が内外ともに少なくない。是れ人の能く知る処である。然るにポ博士の人物に關しては、そんなことは少しも見聞したことがない。博士の神道研究にはそんな臭いにおは発見し得ないであろう。

しかもそのとる処の立場は、神道始め、日本の諸宗教に対して公平無私、白いものを白いと、黒いものを黒いとして、事実有りの儘に公明正大な批判学的価値付けをやっておられたようだ。

故に前にも一言した通り、博士が日本に任んでおられた頃は、政府官憲の思想統一が嚴重で、神社信仰を以て宗教なりなどと公言する学者でもあれば、白眼を以て睨まれるという時代であった。然るに博士は断乎として日本人の神社への信仰は、明かに一種の宗教なり、という結論を持っておられ、それを夙に英国で誌上発表を實行されて居った。蓋し博士の意には正しいものを正しいと言うのに、何の憚るところあらんや、という毅然たる態度であつたと私は信ずる。茲に宗教学者の私としての研究結果が神社信仰もまた一種の宗教なり、という結論に、博士の研究が全く合致していることを知り、海外にも此心友この友人あり、ということに知己を感ぜざるを得なかつた。即ち今や亡し。嗚呼！

×

×

かように私は本書に叙するに當つて、万感交々至ることを痛感せざるを得ない。

尚もう一つ附加えれば、ここまで述べてくると不思議にも宗教信仰の真面目なるものは、人文現象の同一発展期に於ては、知らず識らず彼此相共通し、互いに応酬知照するものがあるということを思わないわけにはいかない。即ち上記の通りポ博士の基督教の信仰が同博士の純粹無垢・至誠一貫の精神より淳々として湧きでてきたものであることを把握して、然して翻つて文明教期に於ける神道の根本義に着眼すると、その道徳原理は清明正直を義とする至誠そのものに存しているということを知ることが出来る。ここにポ博士のように、基督教から入つても、また神道から入つても、ともに宗教信仰の最高峯に於て、互いに一に歸して止むとすることを知るべきだ、ということである。基督教にしても神道にしても各国の宗教が其各自信仰の精醇を汲むに至れば、互いに相和しながら、各自の信仰に忠にして、宗教そのものの理想地に達し得るものであることを、ポ博士の信仰経験が雄弁に物語っている。私は此事実を看

過することが出来ない。

1

西友今何処 無声天地風
伍盲形影弔 生氣一時空

2

不空生氣在 無滅本尊身
愛日持誠友 篇成示此真

題故本尊美博士照影

本尊称美究邦神 審学深思欲識隣
異趣同帰和友好 金剛自信徹純真

(昭和三八・二・一一) 御殿場東山